

風景デザインレーター from 九州(第 12 号)

「風景」の価値を、なんと千年前に見出し、それを体を張って主張した西行。今の私たちの仕事は、この西行を少し見習わなければいけないのではないかとシビアに感じた次第です。

辻邦生の「西行花伝」を読み終えて

風景の価値とは(再考)

600 ページ近い辻邦生の大作「西行花伝」を読み終えました。西行は、平安末期から鎌倉初期に生きた歌僧で、もともとは北面の武士として出世し、かつ才能と行動力で、若くして大きな期待を持たれていた人物なのですが、武士という仕事を捨て、歌の世界に入っていきます。その理由を、この小説では、武士の仕事や社会関係に嫌気をさしてサラリーマンが脱サラをするようにリタイアしたわけではなく、また、花鳥風月に芽生えて世捨て人となったわけでもない。西行は、この世をよりよい世の中にするには、武力や権力による支配でなく、歌による支配が必要であると考え、極めて積極的な理由で歌の世界に入っていったのです。つまり、この世界に満ち溢れる美しい風景、季節ごとに入れ替わる生き物たち、そしてその中で生きていく人間の姿を、愛でる心をベースに置き、その心を持って、世界を動かしていくべきであるという風に考えたのであろうというのです。

この当時から、現在でも、世界を動かしている力は、権力欲と経済力です。彼は、出世し、偉くなることで権力を手に入れそれを頼りに生きていきたい、あるいは金持ちになって金の力を頼りに生きていきたい、そんな考えを持って行動している人間ばかりだと考え、それは違うだろう、そのような不安定なものを頼りに生きていくのではなく、この世界の美しさを理解する力を得ることで、生を肯定

的に捉える力を持つことのほうが、安定して生きていく支えとしてより頼りになるのだということを千年前に主張したのです。

確かに、この世は貨幣経済で成り立っており、人間は生産活動に寄与しなければその対価としてのお金を得ることができないため、一生懸命に働くのですが、そこで得たお金というものは、あくまで生きていくためのものであり、生きていく喜びを味あわせてくれるものはお金の存在ではない。消費行動自体は、あくまで生計を立てるといふこと、あるいは何らかの目的を達成するための方法・手段として行われるもので、消費行動そのものを愉しみとすることは少し危ないのではないかと、以前から感じていました。ものを買って自分の満足感を達成させる、そんなことより、今生きているこの自分を取り巻く風景をしっかりと満喫すること、そのための力を養うこと、そのために道具として、西行は歌、「和歌」を選んだということです。

風景そのものの価値は、その風景をより理解することができる力を持つてはじめて理解することができるのであり、歌を読むなどということは、金持ちの道楽や趣味という領域のものではなく、もっとも根源的に重要なものであると西行は考えたのです。崇徳上皇が、保元の乱に巻き込まれ、すべての権力を陰謀により剥奪され四国に島流しとなり、拳句の果て憤死して日本国を呪ったのは有名な話ですが、その崇徳天皇に対し、



西行は最後の最後まで、権力ではなく、歌の力でこの世を変えてほしいと訴えます。権力も財産も取り上げられることはできても、歌を読むことを取り上げられることはできません。そこに、歌を読む（=この世の素晴らしさを理解する力）ことの本当の力があると訴えます。

今回は、ちょっと長めに読書感想文を書いてしまいましたが、西行は、自分たちを取り巻く風景と、そこに生きる人間の素晴らしさを理解することが、世の中のために、もっとも必要な行為であるということ、なんと千年前に行動力を持って訴え続けた人だったということです。それに比べて西洋の風景の発見のなんと浅はかなこと。労働から解放されている貴族が、農村を訪れ、風景を発見したなののかんの、風景に対する真剣さのレベルが全く違います。

さあ、私たち景観デザイナー、風景デザイナーは、西行のように、なれるでしょうか。

・・・とここまで書いて、昨日(2010.06.11)、風景デザイン研究会のシンポジウムがあり、その特

別企画で、来年退官される篠原修教授をお呼びして討論会がありました。基調講演なしの3時間のフリーディスカッションで、とても面白かったのですが、そのなかで、篠原先生は、「和歌の世界の風景は、貴族、あるいは天皇の味わった風景で、それは庶民に押し付けられた風景であり、規範とするには問題がある」とおっしゃいました。おいおいという感じで聴いていたのですが、ただ、庶民の風景という話には、少し考えなければいけない視点があるのかと思います。つまり、西行がやろうとしている歌による世界美？の理解は、いつか書いた専門家集団の美意識であり、庶民の美意識とはまたレベルというか段階的に違うのではないか、あるいは、最近の文化的景観というものの本当の意味は何？。

これらは、以前書いた柳宗悦の民芸美の話に通じるのだと思いますが、棚田や漁港のような文化的景観も、もしかして目線としての貴族・専門家としての美の対象として見ているのではないのか。庶民の目線の美の範疇なのか。見る人間側(貴族、庶民)の問題なのか、あるいは、見る対象(名所的景観、文化的景観)の違いなのか。これについては、また時間を見て頭の整理をしたいと思います。

今回は、「西行花伝」を読んだ興奮冷めやらぬうちに、風景の価値をどのように見出すのか、その答えを歌の世界に求めた西行の生きざまに心を打たれたということで紹介しました。【続く】

九州におけるこれからの景観デザインを考える。

第5回 風景デザインワークショップ アクロス福岡 1F 円形ホール 参加費無料

<p>座談会 平成22年6月11日(金) 14:30 - 17:30</p> <p>テーマ 『九州におけるこれからの景観デザインを考える。』</p> <p>講師 篠原 修(成慶研究大学院大学教授/東京大学名誉教授)</p> <p>司会 星野裕司(成慶本大学生教授)</p>	<p>事例発表会 平成22年6月12日(土) 10:00 - 16:30</p> <p>①「小戸之橋 市民と創る歩いて楽しい橋づくり」</p> <p>②「子守唄の里 五木の村づくり」</p> <p>③「藤北川プロジェクト 暮らしを守り風景を育てる」</p>
---	---

【講師紹介】

篠原 修(しのはら おしむ)

1945年 熊本県生まれ。社会科専攻

1971年 東京大学大学院土工学専攻修士課程修了

1973年 アン・インダストリー入社

1991年 東京大学工学部助教授

1991年 東京大学工学部教授

現在 成慶研究大学院大学教授、
東京大学名誉教授、工学博士

【おもな著作】

『土木景観設計』技報堂、『日本の景観デザインを考える』編共著 技報堂、
『日本の景観-持続する後の風景』朝倉書店、『景観回廊研究』編著 朝倉社、
『土木造形百年の生半』新澤社、『土木デザイン論』東京大学出版会、
『都市の水辺をデザインする-ブランドステープ判用集』編共著 朝倉社

篠原氏は1980年代から景観に関する研究をはじめ、陸奥、街道、水辺、公園、都市などの景観に関する論文やデザインガイドラインなどの文章を執筆するが、実際に土木構造物の景観デザインや都市や農村の景観設計の実務に携わってきた日本における景観デザインのイニシアチブ的な先駆者です。

2006年には、土木、建築、都市計画、造園、インダストリアルデザインなどの諸分野に共通した風景を醸成するためのデザイン・コラボレーションの必要性を提唱し、『LSDデザイン会議』(LSDはLandscapeの略)を発見し、現在も全国各地で土木構造物や公共空間などの設計指導・監修を行っている。

風景デザイン研究会
「都市・農村の景観のあり方」をテーマとした研究会
www.fukei-design.com

【主催】 建設コンサルタンツ協会 九州支部
 【協賛】 (社)建設コンサルタンツ協会 九州支部